

## 「第8回日韓神学者学術会議」について

著者	清水 正之
雑誌名	聖学院大学総合研究所紀要
号	65
ページ	17-19
発行年	2019-03-31
URL	<a href="http://doi.org/10.15052/00003613">http://doi.org/10.15052/00003613</a>

## 「第八回日韓神学者学術会議」について

聖学院大学総合研究所長 清水正之

二〇一八年一月一六日、聖学院大学とソウルの韓国長老会神学大学校とによる「第八回日韓神学者学術会議——日韓神学シンポジウム2018」が開催されました。この会議は、二〇〇八年に締結された両大学間の学術交流「神学者学術会議」協定に基づいて、開催されるものです。隔年でそれぞれのキャンパスで開催するという協定の趣旨に基づき、今年には聖学院大学を会場として開催されました。

昨年二〇一七年は、韓国長老会神学大学校を舞台に「ルター宗教改革500年」を記念する会議となりました。この会議は、韓国長老会神学大学校と聖学院大学との交流をより緊密に一段深いものとする記念すべき会議となりました。その際の次回の主題等を決める会議において、今年すなわち二〇一八年度の学術会議は「人間論」をテーマとしようと話し合われました。聖学院大学としては、キリスト教が直面している現代の諸状況にかんがみ、また擁する教員スタッフの陣容からも、このテーマに賛成し、今年度の開催に至りました。

聖学院総合研究所では、この学術交流を三つの研究センターの内のひとつ「文化総合研究センター」のもとでの研究会として位置づけ、その主要な活動としております。聖学院大学そして総合研究所の継続している主要な国際的学術交流であります。

今回のテーマは「キリスト教的人間論」とし、日本側からは片柳榮一教授、韓国側からは金道訓教授がそれぞれ主題講演をされ、それに対するコメントを片柳教授に対しては白忠鉉助教授が、金道訓教授に対しては村瀬天出夫特任講師が担当しました。

日韓両国の間には、なおさまざまな問題が横たわっています。そうしたなかでも両校が、一年に一度、きわめて静謐な霊的な学術的交わりの場をもっていることは、いつか必ず現実的具体的な両国間の正義と平和に結びつくことになることを、心より願わずにはいられません。会議の途中には、韓国長老会神学大学校側の代表・申玉秀教授による説教が、全学礼拝の一環としてなされました。力強い明晰な説教に感銘を受けました。

このテーマを二〇一九年の学術会議でも継続することが話し合いの結果決まりました。その意味では、今年度はその最初のこのテーマのもとでの会議となりました。乗り出した方向は、期待以上に今後の実りを予感させるものであった、と言ってよいかと思います。神学、聖書学、哲学、倫理学、科学史・科学哲学など、多様な視点から提起された問題、そして応答には主題に関わる多くの事柄が話題とされ、共に考える機会となりました。シンポジウムは、またそれ以上に両者の間で積み重ねてきた実績を、明確に示すものとなったと思います。

講演された日韓の先生方、片柳榮一教授、金道訓教授、それに対してコメント・対論の役割を果たされた村瀬天出夫特任講師、白忠鉉助教授にはあらためて感謝の意を表します。また、司会を担当された高橋義文教授、例年のことから原稿の翻訳、当日の通訳を優れた語学力で果たされたナグネ（洛雲海）長老会神学大学校助教授、ペク・ジョンファン（白正煥）日本基督教団用賀教会牧師に厚く御礼申し上げます。

またシンポジウム開催まで、島田由紀准教授にはコーディネータとしてこの会議を今後担うことになる世代のおひとりとして多くを担っていただきました。感謝します。また、さまざまに周到な実務的準備をしてくださり会議の一切の

運営を支えて貢献いただいた渡邊正人先生（事務局長・学術支援部長）、菊池美紀職員（学術支援部課長）をはじめ、スタッフの方々には心より感謝を申し上げます。さらには、聖学院大学らしいホスピタリティをもって訪日した先生方の接待の任にあたってくださった久保哲哉主事はじめキリスト教センターの皆様にもこの場を借りて御礼申し上げます。

来年度はソウルで、引き続き「キリスト教的人間論」をテーマとして開催されますが、さらに主題が深められ緊密な知的協働の場が展開することを祈って、今年度の報告といたします。